

## ないしょう 内証

「ないしょ ないしょ ないしょのはなしは あのねのね」

これは童謡どうようの一節ですが、この「ないしょ」は、仏教から来ています。「ないしょ」は、もともと、内うち・外そとの「内うち」に、「証明する」の「証」で、「内証ないしょう」と読みました。

これは、仏教で言う内面ないめんのさとりを意味するものです。人からはうかがい知れない内面の世界を示す言葉であることから、やがて「内密ないみつの」という意味で使われるようになり、さらに具体的に、奥まった場所・暮らし向き・個人的な都合など、意味する範囲が広くなりました。

例えば、『忠臣蔵』で、「赤穂藩あこうの内証は、いたって裕福である」というセリフがありますが、この場合の「内証」は、「藩の財政」の意味です。

このような多くの意味の中から、「人に言えない・内密ないみつの」という意味だけが残り、また読み方も「ないしょう」から「ないしょ」に変化し、現在の使い方になっています。

時々、もとの意味にかえて、「ないしょ、ないしょ」の隠し事ではなく、自分の心を明らかにする「内証」にしたいものですね。

## しゅうきょう 宗教

「宗教」とは、一般的に仏教をはじめ、キリスト教・イスラム教・神道などのあらゆる宗派しゅうは きょうだん・教団を指す言葉ですが、もとは仏教の言葉なのです。

「宗しゅう」と「教きょう」の語は、古くから中国で使われていた言葉です。「宗」は「教えの真髓しんずい」、「教」は「教えの伝え方」のことで、この二つの言葉を組み合わせ「宗教」とし「仏教の真髓もちを説くもの」という意味で用いました。これが、そのまま日本にも伝わりました。

この「宗教」という言葉が、明治時代に入ってきた、英語のレリジョン ( r e l i g i o n ) の翻訳語ほんやくごとして採用されたのです。

レリジョン ( r e l i g i o n ) は「神と人との結びつき」という意味があります。キリスト教の影響の濃い言葉に、仏教の言葉を訳語としてあてたのは、大変興味深いことですね。それだけ、日本語に仏教の言葉が浸透しんとうしていたという証明でもあるでしょう。